



「とっくの昔」に過ぎ去った、若い頃の記憶。
あの当時の「僕」は本当に若かった。

当時14歳だった僕は毎日がパラダイス。
悪友たちと色々なことを「試して」いたし、
アブないことも色々やった。

昔、もう30年以上前とでは世の中が随分と違って、
同好と知り合うだけでも一苦労。
今は、スマートフォンで簡単に知り合って遊べるが、
当時は「携帯電話」なんて持ち歩く14歳は、
同級生の中でも僕ぐらい。

とうとう、昔を懐かしむ歳になってしまったんだな、
と少し悔しく思う反面、
思い返すと「羨ましい」出来事が次々と蘇ってくる。

今でこそ、そのへんにいる「量産型おじさん」だけど、
当時の僕は全てにおいて若さが満ち溢れていた。



痩せていたし、それなりに運動もできた。
悩みなんてほとんどなくて、



ちょっと「シモが貧相」なこと以外は完璧だった…と思う。



授業中は身じろぎ一つせず、
死んだような目で座っているか、
やりたいクラスの男子のことを妄想しているかで、
幸いこの年頃、みんな頭の中はホルモンに支配されている
から、
軽く煽ってやれば誰でもすぐに脱ぐし、
そのまんま誰もいないところに隠れて

行為に及ぶなんてこともあった。

だいたいみんな、
シモの話題になると初体験はいつどこで、と
得意げに語る。
殆どは実在しない「脳内のいい女」だったが。

僕の初体験は下級生の男子。
そいつも僕と同じぐらい淫乱で、
頭の中身が脳じゃなくてホルモンで満たされているような
奴だった。

彼のことは仮に「ハチ」と呼ぶ。
ハチは頭のネジが15本ぐらいはち切れたような、
面白くて変な奴だった。



頭の中身はともかくとして、
スタイルもよく人気があった。
今は二児の父らしいが。



ある日、ハチが僕の家遊びに来ていた時のこと。
突然、ハチが僕に言った。



「ちんぽ見せて！」

面食らうどころの話じゃない。

やる相手(男子限定)に困ったことはなかったけど、
まさか気になっていたこいつからそんなことを言われると
は、
夢にも思っていなかった。

いつものいたずらだろうと思った僕は咄嗟に、
「じゃあお前の見せろよ」
というと……。



「いいけどちゃんと見せてよ？」
そう言ってベッドにごろりと横たわる。

あの時の表情はよく覚えていないけど、
少し恥ずかしそうにしていたように思う。

自分から見せろと言う割に、
逆に見せてと言ったら恥ずかしがる。

変な奴でしょう？



「どう？」

とか、こんなことを聞かれたように思う。

正直この辺りのやり取りはあまり覚えてはいないが、
今でもはっきり覚えているのはむしろ「そのあと」のことで

……。